

### 女性たちが伝える芸能

—松原の真言—

桶川市の最も西に位置する川田谷は、豊かな自然と田園風景が残る地域です。ここはかつてよりの畑作地帯で、荒川河川交通の要衝でもありました。人と物の交流の中で豊かな農民文化が生まれ、多くの民俗芸能も花開きました。現在も獅子舞や万作踊りを始めとした多くの芸能が伝承されており、川田谷は民俗芸能の宝庫ともいえる地域です。



昭和30年頃の真言の様子 (泉福寺)

その中のひとつである「真言」は川田谷の松原地区に伝わる埼玉県内でも珍しい芸能です。そして、この真言を伝承するのは松原地区の女性たちです。今回は埼玉県の無形民俗文化財にも指定されている「松原の真言」についてご紹介します。

松原の真言は、太鼓のリズムに合わせて光明真言を唱えるものです。小太鼓と大太鼓をそれぞれ2つ使用し6人で演奏します。小太鼓の叩き手は「光明真言」を唱えながら演奏をリードします。2つの大太鼓には太鼓の両面にそれぞれ2人が向き合い叩きます。大太鼓の撥には両端に房飾りがついており、大太鼓の叩き手同士はこの撥をお互いに投げ合いながら演奏します。

演目は、「神流」「二本撥」「新囃子」という3演目が伝承されており、演奏もこの順に行われます。

「神流」は、大太鼓の奏者が隣同士で撥を投げ合いながら叩きます。

小太鼓奏者は「ベイロシヤノ／ナカモダラ／マニハンドマジンバラ／ハリハリタヤ／オンオオン／ナブキヤ」と真言を繰り返し唱えます。

「二本撥」は、最も技巧が凝らされた大太鼓の撥さばきが見られます。大太鼓の奏者は撥を真上へ投げ上げるほか、斜め同士の奏者と撥を交

差して投げ合いながら叩く「スジカイ」と言う技も見られます。小太鼓奏者は「オンオンナブキヤ／ベイロシヤノ／ナカモダラ／マニハカドマジン／ハラハラハリタヤ／ソラソラナブキヤ」と繰り返し唱えます。また、この一本撥には踊りが伴います。踊り手は両手に大太鼓の撥をもって踊りますが、決められた型はなく、曲のリズムに合わせて踊ります。



関東ブロック民俗芸能大会での演技 (令和3年11月)



桶川市チャンネル (YouTube)  
松原の真言▶

「新囃子」は、「神流」と同じように大太鼓の奏者が隣同士で撥を投げ合いながら叩きます。この演目では真言の中にお囃子の太鼓の「ジゴト」をまじえて唱えるという特徴があります。ジゴトとは、楽器の音を擬声的に表したものです。「ジンジンバラ／テレスクテンスク／テンテ

ン／テンテレスク／テケテンノ／ベイロシヤノ／ナカモダラ／マニハンド／ドッコイ」と繰り返し唱えます。お囃子をやったことがある方はピンとくるかもしれません。また、「テレスクテンスク／テンテン／テンテレスク／テケテン」の部分がジゴトです。

真言がいつ、どこから松原に伝わったのかについては伝承がありません。また、演目のもつ意味なども伝えられていません。まさに謎多き芸能といえます。埼玉県内でも真言が伝えられた地域はいくつかありますが、若干の共通点はあるものの、芸の内容にはそれぞれ独自性があるようです。また、女性だけが担い手であるのは松原の特徴です。

昭和30年頃までは市内の泉福寺や弥勒院、浄念寺のほか、川越の喜多院や上尾の馬蹄寺を始め、多方向から招かれ演じていたそうです。現在は川田谷の泉福寺で、花祭り(4月)や施餓鬼法要(8月)の際に演じられます。息の合った女性たちが奏でる太鼓のリズムと撥の投げ合いはすばらしく、見る者を惹きつけてくれます。

詳しくは **生涯学習文化財課** 788  
—4971